



超高压と低温が生んだ奇跡

日本の「国石」ヒスイ

吸い込まれるような深い緑の宝石ヒスイ。その名は青や緑に輝く羽を持つ「翡翠（カワセミ）」に由来するとされる。日本では縄文時代から勾玉（まがたま）などの装飾品として珍重され、人々の繁栄と幸福の願いが込められてきた。日本の国石に指定されたのは2016年のことだ。

ヒスイと呼ばれる石には、希少で高価な硬玉（こうぎょく）と、より産出量の多い軟玉（なんぎょく）がある。見た目は似ているが、硬さや成分のほかに成り立ちも全く異なる別の鉱物で、国石は「硬玉」の方だ。

硬玉は、地球表層のプレートが別のプレートの下に沈み込む「沈み込み帯」で生まれる。約1万気圧の超高压ながら、200〜300度と地質学的には低温の状態が数億年続くというごく限られた環境が、硬玉の故郷だ。複数のプレートのひしめき合う日本列島は、この奇跡の石を育む絶好の条件を備えている。

新潟県糸魚川市は古くからヒスイの里として知られ、「古事記」にも登場する。大国主命（おおくにぬしのみこと）が奴奈川姫（ぬなかわひめ）に求婚する物語。この女神、伝承ではヒスイを用いた祭祀（さいし）で国を治めていたという。

世界有数の硬玉産地である糸魚川市は、09年に日本で初めてユネ

糸魚川産の硬玉



スコ世界ジオパークに認定された。国の天然記念物の小滝川ヒスイ峡などでは採取が禁じられていたが、海岸に打ち上げられたヒスイは誰でも自由に拾うことができ

る。悠久の時を経た神秘の輝き。糸魚川の浜辺で「探石」を楽しんでみてはいかかだろうか。＝おわり

長谷川裕昭（はせがわ・さとし） 1978年、群馬県生まれ。大学・大学院で地質学を専攻し、建設コンサルティング会社のハナ代エンジニアリング（東京都台東区）で公共インフラ整備事業のリスク評価に従事。幼少期から「石」にこだわり、「石オタク」の名でテレビなどに出演、SNSを通じて発信に取り組んでいる。